

# フランス語における否定文の直接目的補語 として現れる不定名詞句 UN N について

長 沼 圭 一

## 1. はじめに

フランス語においては、否定文中の直接目的補語の位置に現れる名詞句に付く不定冠詞および部分冠詞は通常 *de* という形で現れる。

しかしながら、次の例が示すように、このような環境においても、不定冠詞が *de* にならない例も見られる。

- (1) J'ai montré mon chef-d'œuvre aux grandes personnes et je leur ai demandé si mon dessin leur faisait peur.

Elles m'ont répondu : « Pourquoi un chapeau ferait-il peur ? »

*Mon dessin ne représentait pas un chapeau.* Il représentait un serpent boa qui digérait un éléphant. J'ai alors dessiné l'intérieur du serpent boa, afin que les grandes personnes puissent comprendre. Elles ont toujours besoin d'explications. (SAINT-EXUPÉRY, Antoine de, *Le petit prince*, 1987, pp. 9–10, Gallimard)

- (2) *L'âge de la majorité ne constitue pas une césure sociologique.*

Entre 15 et 19 ans, l'entrée dans le monde des adultes est amorcée, avec une stabilisation des pratiques et des préférences. L'âge adulte commence officiellement à 18 ans (majorité), mais celui de l'enfance n'est pas terminé ; beaucoup de jeunes ne sont en effet pas pressés d'assumer la responsabilité de leur destin. (MERMET, Gérard, *Franco-scopie 2007*, 2006, p. 134, Larousse)

果たしてこれらの例において、なぜ否定文の直接目的補語として現れている名詞句が DE N ではなく、UN N で現れているのかについて、以下で論じ、そのメカニズムについて明らかにしてゆく。

## 2. 先行研究

文法書においては、否定文中の不定冠詞および部分冠詞について次のように記述されている。

「名詞文において、否定は *de* によって構成される。

*Pas d'histoire ; pas de quartier.*

否定形に置かれた動詞の目的補語名詞も縮減形 *de* によって表される。

*Je n'ai pas de chaussures (pas des とはならない).* (CHEVALIER et al., 2002, p. 226)<sup>1)</sup>

「否定文の補語名詞句においては、対応する肯定文において *un, du, de la, des* が用いられる場所に *de* というマーカーが用いられる：*J'ai un billet / Je n'ai pas de billet — J'ai du pain / je n'ai pas de pain — Il y a des gâteaux / Il n'y a pas de gâteaux.*」 (RIEGEL et al., 1994, p. 163)<sup>2)</sup>

「肯定形を否定形に換える場合、直接目的語または「実」主語を伴う不定冠詞または部分冠詞は *de* に置き換えられる：

*Il boit du vin → Il ne boit pas de vin, あるいは ... jamais de vin, あるいは ... plus de vin. — Il y a un enfant → Il n'y a pas d'enfant. — Elle a des amis → Elle n'a guère d'amis, あるいは ... pas d'amis あるいは Elle n'a d'amis nulle part. — Quelqu'un a des amis → Personne n'a d'amis あるいは Ni l'un ni l'autre n'ont d'amis. — Ex. : Vous ne m'avez jamais fait de peine (PROUST, *Rech.*, t.I, p. 145). — Il n'y a pas de grandes personnes (MALRAUX, *Antimémoires*, p. 10). — Il ne faut pas dire de mal des serpentins (BRASILLACH, *Sept couleurs*, p. 158). — Ne faites-vous jamais de projets d'avenir, mon enfant ? (Green, *Mont-Cinère*, XXVII.)」 (GREVISSE, 1993, p. 874)<sup>3)</sup>*

しかしながら、文法書の多くがその直後に例外について言及している<sup>4)</sup>。

「しかしながら、否定が名詞そのものでなく、名詞に付随する性質に及んでいる場合、冠詞 *du, de la, des* が可能である：

Je ne vous ferai pas *des reproches frivoles* (RACINE).

Je n'ai pas vu *des fleurs*, mais *de l'herbe*.」(CHEVALIER et al., 2002, p. 226)<sup>5)</sup>

「以下のような場合、不定冠詞または部分冠詞が保たれる。

一文（または文の構成要素）が肯定的意味を持つ場合：On ne saurait faire une omelette sans casser *des œufs* (Ac.). [= On casse nécessairement des œufs.] — N'avez-vous pas *des amis* pour vous défendre ? [= Vos amis devraient vous défendre.] — Est-ce que vous pouvez empêcher qu'on ne donne *des sérénades* à votre femme ? (MUSSET, *Capr. de Mar.*, I, 2.) [虚辞の ne.] [...]

一否定が実際には名詞に及んでいない場合：On n'y voyait presque jamais *des barques de pêche* (P. BENOIT, *Axelle*, p. 10). [= On y voyait éventuellement des barques, mais non des barques de pêche.] — Je n'ai pas amassé *des millions* pour envoyer mon unique héritier se faire casser la tête en Afrique ! (AUGIER, *Effrontés*, I, 2.) [= J'ai amassé des millions, mais non pour...]

一否定されている名詞句が同じ機能を持つ別の名詞句と対立している場合：Elle n'a pas demandé *du vin*, mais *de la bière*. — 対立が含意されている場合：Nous ne disons pas *du mal* de lui ! (IONESCO, *Amédée*, p. 256.)

動詞 être の属詞に関して、不定冠詞または部分冠詞が用いられるのは同じ理由によるものと考えられる：Ce n'est pas *une* parente. — Ce n'est pas *du vin*, ni *de l'eau*.」(GREVISSE, 1993, pp. 874-875)<sup>6)</sup>

「否定が動詞・名詞の両方に及ばず、その一方、または名詞の付加辞、状況補語などに及ぶとき、何が否定されるかは話し手の考え方で定まるから、de と un [des, ...] の使い分けは一定しない。

①対立を表わす文：Le président a déclaré qu'on ne lui demandait pas *des appréciations*, mais *des faits*. (CAMUS, *Etr.*, 135) 「裁判長は、判断ではなく事実をきいているのだとはっきり言った」▶demandait が否定されているのではなく Ce n'était pas *des appréciations* qu'on lui demandait. の意. [...]

②肯定を表わす修辭的否定疑問文：N'avons-nous pas *des goûts bien proches* ? (BUTOR, *Modif.*, 153) 「私たちはずいぶん近い趣味を持ってい

るのではないのでしょうか」(Nous avons des goûts bien proches. を修辭的に否定疑問で表わしたもの) / Tu n'as pas un objet d'inquiétude quelconque? (ROUSSIN, *Enfant*, 243) 「何か心配事があるんじゃないの」

③文全体の否定: Tu fais un drame de rien. — Je ne fais pas un drame. (SAGAN, *Brahms*, 163) 「あなたは何でもないことを大げさに考えるのね。 — 大げさに考えているわけではないよ」 / Ne me dis pas un mensonge ! Un mensonge inutile ! — Je ne dis pas de mensonge. (ANOUILH, *N.P.N.*, 94) 「おれにうそを言うのはやめてくれ。無用なうそはな。 — わたしやうそはつかないよ」 / Mon dessein [sic] ne représentait pas un chapeau. (ST-EXUP., *Prince*, 10) 「私の絵は帽子を描いているのではなかった」<sup>7)</sup> / Elle lit éperdument quand elle n'écoute pas de la musique. (DÉON, *20 ans*, 262) 「音楽を聴いていないときは、夢中で本を読んでいる」 [...]

④否定が付加辞、副詞などに及ぶとき: Je n'aurai pas du courage éternellement. (ANOUILH, *Antig.*, 76) 「いつまでも勇気を持ち続けるわけにはいきません」 / Je n'ai jamais rencontré une femme aussi indéchiffrable. (*Thib.* II, 250) 「あんな正体の知れない女に出会ったのは初めてだ」 ▶ 勇気はあるだろうがそれが永久に続くとは思えない、女には会ったが、あんな不可解な女には会ったことがない、の意。 / On ne dit pas une chose comme ça. (CLAIR, 34) 「そんなことは言うものじゃない」 / Elle ne lui avait jamais fait un tel aveu. (CASTILLOU, *Etna*, 109) 「彼女が彼にこのような告白をしたことは一度もなかった」 [...]

⑤ pas un+名 (=pas un seul) → pas un 1°」(朝倉, 2002, p. 57)

朝倉(2002)は、最後に指摘している pas un seul N (たった一つの～もない)の意味で用いられる pas un N の例として次のような例を挙げている。

- (3) Il n'y a pas un nuage au ciel. (GIONO, *Regain*, 50, cité par 朝倉, 2002, p. 371)

朝倉(2002)はここで現れている un は数詞であるとしている。福島(2010b)も次のような例における pas un N の un は数詞であるとしている。

フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句 UN N について

- (4) Je n'ai pas un arbre. (福島, 2010b, p. 34)
- (5) Je n'ai pas un chat, mais trois. (福島, 2010b, p. 35)

数詞 un の否定は (3), (4) のようにゼロを表す場合もあれば、(5) のように 1 より大きい数字を表す場合もある。要するに、1 以外の数字であるということしか表していないのである。さらには、具体的な数字によって訂正されることなく、複数であることだけが示される場合もある。

- (6) Il n'a pas un enfant : il a des enfants. (一川, 2001, p. 105)

また、数詞を用いた pas un N は、直接目的補語としてだけではなく、主語に立つこともできる。

- (7) Pas un bruit n'arrivait de la rue. (GREEN, *Mesurat*, 21, cité par 朝倉, 2002, p. 371)
- (8) Pas un étudiant n'est venu. (FLAUX, 1997, p. 54)

一方、一般に pas de N が主語の位置に現れることはない。

- (9) \*Pas de pain n'est sur la table. (FLAUX, 1997, p. 54)
- (10) \*Pas de livres n'ont été achetés. (*ibid.*)

このようなことから、pas un N の un が数詞である場合は、不定冠詞である場合と区別すべきであろう<sup>8)</sup>。

したがって、否定文の直接目的補語として不定冠詞 un, une, des または部分冠詞 du, de la を含む不定名詞句が現れる条件は次のように大別できるであろう。

1. 肯定的意味を持つ場合。
2. 否定が付加辞や副詞に及んでいる場合。
3. 名詞句の対立がある場合。
4. 文全体が否定されている場合。

これらのうち、1と2については実際には名詞が否定されていないため、*de N* とならないことが正当化されると考えられる。では、3と4についてはどのように説明すべきであろうか。

福島(2010a)は、否定文の直接目的補語の位置で不定冠詞が *de* になる場合と、*de* にならない場合について次のような例を挙げている。

(11) Il n'y a pas de poissons dans cet étang. (福島, 2010a, p. 34)

(12) Il n'y a pas des maladies, mais des malades. (*ibid.*)

福島(2010a)によると、(11)と(12)においては「否定のスコープ」が違うということである。すなわち、(11)では「魚」というものの「存在」に及んでいるのに対し、(12)では「病気」というもののいわば「名札」に及んでいるということである。否定文において属詞位置の不定名詞句が *de N* にならないのも同様の理由であり、

(13) C'est un poisson. → Ce n'est pas un poisson. (*ibid.*)

となるのは、「魚」という「名札」を貼るべきものではないという内容であるからであると、福島(2010a)は説明している。

朝倉(2002)においては以下のことが指摘されている。

(14) On ne lui demandait pas des appréciations. (朝倉, 2002, p. 57)

(14') Ce n'était pas des appréciations qu'on lui demandait. (*ibid.*)

対比を含意する *des N* を持つ否定文(14)は(14')のように解釈され、この場合、元の文において否定文の直接目的補語の位置に現れていた不定名詞句は、強調構文に書き換えられることによって、焦点の位置、すなわち属詞として現れている。一川(2001)も同様の指摘をしている。

(15) Je ne mange pas du pain, mais du riz. (一川, 2001, p. 102)

(15') Ce n'est pas du pain, mais c'est du riz que je mange. (一川, 2001, p. 105)

このように、否定文の直接目的補語の位置に現れている不定名詞句が対比

を持っている場合、属詞位置の不定名詞句と同様の働きをしていると考えられる。

したがって、対比がある場合には、直接目的補語の位置にある不定名詞句であっても、否定が及んでいるのが「存在」ではなく「名札」であるため、UN N の形が保たれると説明できる。では、文全体が否定されている場合の直接目的補語 UN N はどのように説明すべきであろうか。以下では、実例を元に分析を行う。

### 3. 実例分析

Frantext から否定文中の直接目的補語として現れる un N, une N, des N の例を収集する。対象を不定冠詞付きの名詞に絞るため、明らかに数詞であると考えられる un(e) seul(e) N の例は最初から除外する。また、煩雑さを避けるために、部分冠詞は対象とせず、否定の副詞は pas のみに限定する。こうして収集した 104 例について分析を行う。

まず名詞の特徴を観察してみると、もっとも多く出現した名詞句は un mot で、15 例見られた。

- (16) Je me suis aperçue soudain que je n'écoutais pas *un mot* de ce qu'il disait. (BERR, Hélène, *Journal 1942–1944*, 2008, p. 74, 1942)
- (17) Il dit « oui » et nous partons. Il a un sac, assez gros, au vestiaire. Dans la voiture — j'ai la voiture de Monique — il ne dit pas *un mot*. Nous ne nous touchons pas. (LAGARCE, Jean-Luc, *Journal 1977–1990*, 2007, p. 369, CAHIER XIII)
- (18) Au procès de Laval, comme à celui de Pétain, il n'y avait pas eu *un mot* sur la déportation. La question juive était complètement occultée. (VEIL, Simone, *Une vie*, 2007, p. 124, IV Revivre)

しかしながら、un mot の un は不定冠詞ではなく、数詞であると考えられる。これは日本語で「一言もしゃべらない」などという場合と同じであろう。

仏和辞典には、mot に関して次のような表現が成句として挙げられている。

ne pas dire un mot = ne dire mot = ne souffler mot 「一言もいわない、沈黙を守る」(小学館『ロベール仏和大辞典』)

sans mot dire ; sans dire un mot 「何も言わずに、黙って」(旺文社『ロワイヤル仏和中辞典』第2版)

これらの表現から、un motが限定詞を失ってもつばら否定の副詞へと変化している様子が窺える。これはまさに現在最も一般的に用いられている否定の副詞 pas が名詞から変化していった過程と同じである。石野(2007)はフランス語の否定形について以下のように述べている。

「もともとフランス語の否定形は動詞の前の ne だけでした。少し古い言い方になると、「ne+動詞」だけの否定文が見られます。現代語でも文語的な言い方で「ne だけ」が見られます。

ラテン語では、否定する語の前に non をつけました。スペイン語やイタリア語では今も、それぞれ no や non を動詞の前につけて否定します。

しかしフランス語では、否定の音が弱くなってしまいました。話し言葉の場合、アクセントも動詞の方に置かれるため、これでは否定が十分に聞こえない可能性があります。そこで否定を強調するように動詞の後につけたのが pas でした。

この pas は「一歩、二歩」の「歩」のことで、初めは aller 「行く」や marcher 「歩く」の否定の後につけて、「一歩(un pas)も行かない、歩かない」という形で使われました。それがあつという間に他の動詞にもつけられるようになってしまったのです。そして書き言葉でも「ne ... pas」が標準になりました。

同様の発想で、「ne ... point」 「一点も…ない」という表現も見られましたが、現代語ではあまり使わなくなりました。(石野, 2007, pp. 105-106)

また、GREVISSE(1993)は、pas や point だけでなく、mot も含め、量や程度の少なさを表すいくつもの語が否定の補助として用いられていたことを指摘している。



「中世のフランス語において一般的な否定語であった無強勢形の *ne* は、とても早い時期に、*pas*, *point*, *mie* (= *miette*), *goutte*, *mot*, *nois*, *pois*, *espi*, *maaille* (小額の硬貨), *dé*, *bouton*, *denier*, *pomme*, *grain*, *festu* などの少量、小規模、価値の低いものを表す名詞によって補強された。例：*Ne veez [= voyez] GUTE (WACE, Brut, 516). — Gaufrois nel crient [= ne le craint] un espi de froment (ADENET LE ROI, Enfances Ogier, 321). — Ne li grevoit travaux [= l'effort ne lui était pas pénible] UNE MAAILLE (ib., 5406)*. 語の選択はどの地域でも同じようになされていたわけではなく、*point* が一般的な補助語である方言もあれば、*mie* が一般的である方言もあり、さらには *nient* が一般的である方言もある。ノルマンディー地方では、*brin* が用いられている：*J'avais peur du mal de mer et je n'en ai BRIN (FLAUB., Corresp., 1<sup>er</sup> déc. 1849). — Elle [= une négresse] n'est BRIN blanche [dit un paysan] (MAUPASS., C., Boitelle)*. また、古めかしい印象を与えるためにこの語をもちいることもある：*De tels noms ne lui vont BRIN (BÉRANGER, Chans. nouvelles, Baptême de Volt.)*。」(GREVISSE, 1993, p. 1452)<sup>9)</sup>

現代フランス語においては *mot* を否定の副詞のように用いる用法は成句に残るのみであるが、*pas un mot* の形で否定を強調する手段が現在では広く使われているということであろう。

収集例の中には、*un mot* と同様に、UN N によって量の少なさを表し、否定を強調していると考えられる例がいくつか観察される。このような例としては、名詞が貨幣、時間、重さなどの単位を表しているものが多い。

- (19) Il faudrait aussi pouvoir acheter des timbres en cachette, or je n'ai pas *un sou* et jamais, jamais, depuis que je suis ici, je n'ai rencontré le facteur. (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 53, I VAUX)
- (20) Oui, semblable à mon Jacques, de Vaux, Roland Forgeard portait en lui l'amour inné de la musique et il n'en perdait pas *une once* en se disant «*Je vise trop haut*». (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 158, I VAUX)
- (21) Mme Euphrasie Guerrault, dite Phrasie, ne perd pas *une seconde*. De tout

son gros corps, elle se précipite vers moi pour me bicher sur les deux joues en m'attrapant aux épaules. (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 109, I VAUX)

(19) の sou はかつてフランスで使われていた貨幣単位であるが、日本語でも「一文無し」や「一銭も持っていない」のように古い貨幣単位を用いて表すことと類似している。(20) の once は本来重量単位であるが、現在では「少量」を表す語としても用いられている。(21) が「一秒も」という強調を表していることは言うまでもないであろう。以上の例における UN はいずれも数詞であると考えられる。

次の例においては、名詞が単位を表しているわけではないが、UN の使用によって否定が強調されていると考えられる。

(22) Sa mort ne surprit personne. Je n'ai pas versé *une larme*. (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 344, II CHEZ LES ZERVOS)

(23) Il sait bien qu'il est obligatoire d'aller en classe ; cependant il ne dit rien, ne fait pas *un geste*, ne bouge pas d'un pouce. (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 49, I VAUX)

(22) では一粒の涙も出なかったことを、(23) では少しも動かないことを表しており、この場合も数詞 UN を否定することによってゼロであることを強調していることが分かる。

また、既に前述したが、数詞 UN の否定は、「1」でないことを言っているに過ぎず、必ずしも「0」を表しているわけではない。

(24) Pourtant, heureusement, l'univers est tellement compliqué qu'aucun sociologue ne peut mettre les gens dans des cases. Il n'y a pas « *une* » *clef* aux choses, ni une *clef* psychanalytique, ni une *clef* sociologique, il y a quarante *clefs* et plus encore... (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 179, CHAPITRE 12 Les affinités artistiques)

この例においては、*une* をギョメで囲むことによってそこに否定の焦点が当たっていることを強調している。しかし、鍵が「1つもない」ことを表しているのではなく、後続文脈からそれが40以上もあるということが分かる。

次に、名詞の修飾語句に注目する。104例のうち、修飾語句を伴っていない例が43例、修飾語句を伴っている例が61例観察され、修飾語句を伴っている例の方がかなり多いことが分かる。このうち修飾語句として形容詞を伴っている例は41例見られる。

これらの形容詞の多くは叙述的であり、否定のスコープは名詞ではなく、形容詞に及んでいると解釈できる。

- (25) Il ne gardait pas *un bon souvenir* de la période où il était un professionnel de la politique. (LINHART, Virginie, *Le jour où mon père s'est tu*, 2008, p. 131, 8 La politique)
- (26) Entre mes Petits Couteaux et certains petits objets que Viallat a fabriqués, il n'y a pas *une différence énorme*, même si le concept est autre. (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 51, CHAPITRE 3 Faire des coups)
- (27) Si tu prends l'art au sérieux, tu joues gros. Bien sûr, tu peux t'amuser, te saouler, mais malgré tout tu n'as pas *une vie ordinaire*. (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 165, CHAPITRE 11 Vie d'artiste)

(25)において、否定は *souvenir* に及んでいるわけではない。思い出は存在しているが、その思い出が良いものではなかったということを言い表しているのである。すなわち、ここで否定されているのは *souvenir* そのものではなく、むしろ *bon* という形容詞である。(26)においても、「違い」は存在しているのであり、その違いが「大きく」はないと言っているのである。(27)も同様に、間違いなく「生活」は送っているわけで、その生活が「普通」ではないと述べているのである。したがって、これらの例においては、否定のスコープが名詞ではなく、その修飾語句である形容詞に及んでいるのであり、次のような言い換えが可能であると考えられる。

- (25') Le souvenir qu'il gardait de la période où il était un professionnel de la politique n'était pas bon.
- (26') La différence qu'il y a entre mes Petits Couteaux et certains petits objets que Viallat a fabriqués n'est pas énorme, même si le concept est autre.
- (27') [...] mais malgré tout la vie que tu as n'est pas ordinaire.

しかしながら、すべての形容詞付きの名詞に関してこのような言い換えが可能なのわけではない。

- (28) Est-ce que M. Valéry n'a pas laissé *un petit paquet* pour moi ? (BERR, Hélène, *Journal 1942-1944*, 2008, p. 17, 1942)
- (29) Pour resituer un peu l'époque, j'ai une anecdote sur Szeemann. On était devenus vraiment très amis avec lui, ainsi qu'avec sa femme. Et Annette avait gardé son tout petit appartement de deux pièces à Paris, très vétuste. Szeemann vient à Paris pour huit jours, et on lui prête l'appartement. Aujourd'hui, on ne verrait pas *un grand directeur de Documenta*, venant huit jours à Paris, loger dans une chambre d'étudiante et en être ravi ! (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 64, CHAPITRE 4 Les mythologies personnelles)

これらの例を次のように言い換えるのは不自然であろう。

- (28') ?Est-ce que le paquet que M. Valéry a laissé pour moi n'est pas petit ?
- (29') [...] ?Le directeur de Documenta qu'on voit aujourd'hui ne serait pas grand.

(28) の *petit* は *paquet* について叙述しているわけではなく、*paquet* を限定していると考えられる。すなわち、*petit paquet* で一つの概念を表しているのであり、全体で一つの名詞と同様に不可分なものとなっていると捉えられるのである。(29) も同様であり、*grand directeur* で一つの役職を表しているのである。

最後に動詞に注目してみる。最も多く観察された動詞は *avoir* で29例見られた。次に多かったのは *il n'y a pas* で12例、続いて *faire* と *constituer* がそれぞれ7例ずつ見られた。*Avoir*, *il y a*, *faire* については、日常的によく

使われる動詞や表現であるため、出現の頻度が高いのは当然と言えるが、*constituer* のように必ずしも日常的に頻繁に現れるわけではない動詞が多く観察されるというのは注目すべき点である。

- (30) Ces petites œuvres spontanées ne *constituaient* pas des amusettes et n'étaient pas destinées à me distraire ou à me charmer. Par elles, à travers elles, il poursuivait le dialogue avec lui-même. (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 382, II CHEZ LES ZERVOS)
- (31) Quel que soit l'impératif intérieur qui me pousse à quitter mon milieu, mon pays natal, Jérusalem ne *constitue* pas un refuge. Il y a la vie de tous les jours. (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938–1950*, 2008, p. 406, II CHEZ LES ZERVOS)

これらの例で用いられている動詞 *constituer* は他動詞ではあるが、解釈上はコピュラに近く、*être* に置き換えてもほとんど問題はないと考えられる。

- (30') Ces petites œuvres spontanées n'*étaient* pas des amusettes [...]
- (31') [...] Jérusalem n'*est* pas un refuge.

コピュラ文の属詞位置における不定冠詞付きの名詞は、たとえそれが否定文になったとしても DE N に変わることはないが、解釈上コピュラ文の属詞と同様であるからといって、それだけで否定文の直接目的補語の位置に現れる UN N を正当化したことにはならないであろう。

では、なぜコピュラ文の属詞位置では否定文であっても UN N のままでよいかということになるが、それは福島 (2010a) が指摘しているように、否定のスコープが、名詞が表しているものの「存在」ではなく、名詞が表している「名札」に及んでいるからである。否定文の直接目的補語であっても、対比がある場合に UN N で現れているのは、同様に否定されているのが「存在」ではなく、「名札」であるからであることは既に見たとおりである。

次に否定のスコープという観点から UN N について考察を行う。

#### 4. 否定のスコープ

否定文の直接目的補語において不定名詞句 UN N が現れる条件について、次のような大別を行った。

1. 肯定的意味を持つ場合。
2. 否定が付加辞や副詞に及んでいる場合。
3. 名詞句の対立がある場合。
4. 文全体が否定されている場合。

実際の収集例では数詞 UN を含む名詞句も見られるためここに、

0. UN が数詞である場合。

を含める。これらを否定のスコープという観点から命名し直すと次のようになるであろう。

0. 否定が数詞に及んでいる場合。
  1. 否定がどこにも及んでいない場合。
  2. 否定が付加辞や副詞に及んでいる場合。
  3. 否定が名詞の「名札」に及んでいる場合。
  4. 否定が文全体に及んでいる場合。

収集例をこれら5つに分類したところ、以下のような結果が得られた。

0. 否定が数詞に及んでいる場合：35例
  1. 否定がどこにも及んでいない場合：12例
  2. 否定が付加辞や副詞に及んでいる場合：32例
  3. 否定が名詞の「名札」に及んでいる場合：8例
  4. 否定が文全体に及んでいる場合：17例

以下では、それぞれの分類について考察を行う。

まず、否定が数詞に及んでいる場合、ほとんどの例においては、数詞「1」

フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句 UN N について

を否定することによって得られる結果は「0」である。

- (32) Mais hier je suis retombé dans mon trou et *je n'ai pas écrit une ligne*.  
(GUIBERT, Hervé, *Le protocole compassionnel*, 2007, p. 24)

しかしながら、理論上は1以外の数詞であれば何でもよいわけであり、実際に2以上の数詞に導かれることもある。

- (33) Il n'y a pas « *une* » clef aux choses, ni une clef psychanalytique, ni une clef sociologique, il y a *quarante* clefs et plus encore... [= (24)]

(33) について、鍵が40以上あるのであれば、1つあることも真であるはずであるが、情報の適正という点から考えて正しくないことになると言える。これは、例えば20歳の人が *J'ai dix-huit ans*. と言えないのと同様のことであろう。

次に、否定がどこにも及んでいない場合の例としては、朝倉 (2002) が指摘しているように、疑問文の形で現れるものが多く観察される。

- (34) Est-ce que M. Valéry n'a pas laissé *un petit paquet* pour moi ? [= (28)]  
(35) Quand un musée m'invite, je demande : *Est-ce que vous n'avez pas un grenier, une cave ?* (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 251, CHAPITRE 17 Catalogue raisonné)

(34) においては話し手が小さな包みが残されていることを期待して質問しており、(35) においては聞き手が屋根裏部屋か地下室を持っているであろうことを期待して質問していると考えられ、したがって (34) では *petit paquet* が、(35) では *grenier* や *cave* が潜在的に存在していることが前提となっている。

また、否定文において肯定的意味を持つ直接目的補語は、条件節においても観察されると考えられる。

- (36) Je suis le plus mauvais voyageur qui soit ! Je ne voyage jamais *s'il n'y a pas une raison liée au travail*. (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie*

*possible de Christian Boltanski, 2007, p. 205, CHAPITRE 13 Les années noires)*

(36) では、「仕事と関係のある理由がなければ決して旅行しない」と言っているが、これは言い換えれば「仕事と関係のある理由があれば旅行する」ということであり、「仕事と関係のある理由」は暗に存在していることになる。

これらの例においては、肯定的な意味解釈によって UN N の出現が正当化されうるが、それならばなぜ否定形で現れるのかということになる。この否定は、話し手が思い描いている可能世界の中に存在するものであって、あえて否定のスコープを探し出すとすれば、それは話し手の思考ということになるであろう。

否定が付加辞や副詞に及んでいる場合は、否定のスコープは、名詞を修飾している形容詞、前置詞句、関係節や、動詞を修飾している副詞にかかっている。

- (37) Je savais pour l'avoir lu dans des romans que tant que la bougie brûlerait au bout de son bras, tant que nous apercevriions une lueur à l'entrée du boyau, cela signifierait qu'il ne respirerait pas un air vicié. (ROUX, Annelise, *La solitude de la fleur blanche*, 2009, p. 111, ANTOINE)
- (38) Dominique (et Denis) oublie parfois que tout le monde n'est pas fonctionnaire, que *tout le monde n'a pas une vie réglée comme du papier à musique*. (LAGARCE, Jean-Luc, *Journal 1977–1990*, 2007, p. 147, CAHIER X)
- (39) Après le déjeuner, je suis retournée chez Redon avec Maman, mon doigt n'était pas beau. Il m'a fait quatre piqûres pour m'anesthésier. *Cela ne m'a pas fait une impression très agréable*. (BERR, Hélène, *Journal 1942–1944*, 2008, p. 35, 1942)

(37) においては、空気は吸うが「汚染した」空気は吸っていないのであり、(38) においては、皆が生活を送っているが必ずしも「規則正しい」生活を送っているわけではないのである。(39) においても同様に、印象は持っているがそれがあまり気持ちのいいものではないことを表しているのだ



る。したがって、これらの例においては名詞が表しているものの存在が完全に否定されているわけではなく、いわば部分否定であると言える。

否定が名詞の「名札」に及んでいる場合については、収集例の中には明示的に名詞句の対立が見られるものはなかった。既に見たように、constituer という動詞が用いられている場合は、直接目的補語が解釈上属詞に近く、これが否定された場合には、名詞句の対立がある場合と同様、「存在」の否定ではなく、「名札」の否定であると考えられる。

- (40) *Les attentats de ce qui était devenu « la semaine sanglante » ne constituaient pas un événement, ils n'avaient pas changé l'existence du plus grand nombre, juste une façon de se vivre au-dehors dans un sentiment d'inquiétude et de fatalité qui avait disparu sitôt le danger éloigné.* (ERNAUX Annie, *Les Années*, 2008, p. 163)

(40) においては、「流血の一週間」となった一連のテロ行為が événement と呼ぶにふさわしいものを成していなかったことを表している。ここでの不定冠詞の働きに関しては、日本語で「一大事」などというのに近く、名詞が表しているものの性質を不定冠詞によって強調しているように思われる。

また、il y a 構文の否定においてもこの種の UN N であると考えられるものがいくつか見られる。

- (41) *Je crois que ce sera Annette, mais je n'y ai pas pensé... J'aimerais mieux qu'il n'y ait pas un dépositaire. Parce que ce qui tue les artistes, ce sont les veuves, les secrétaires !* (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 228, CHAPITRE 15 La vie des œuvres)

(41) においては、「委託販売業者」というものが不必要ということをおっており、dépositaire という名称が否定の対象となっていると考えられる。次の例も il y a 構文の例であるが、名詞が表す名称に否定がかかっていることが明示されている。

- (42) *Il y avait des individus forts parmi eux, mais ça n'a pas constitué un groupe*

comme celui de l'arte povera. Et pour ma génération, il n'y a eu aucun critique ou conservateur comme Restany, Szeemann ou Celant, *il n'y a pas eu un « chef »*. (BOLTANSKI, Christian GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 191, CHAPITRE 12 Les affinités artistiques)

この例においては、話し手の世代に「指導者」の名にふさわしい人物が現れなかったことを表しているが、*chef* という名詞をギユメで囲むことにより、否定がメタ言語的にこの名称に及んでいることが明示されている。

ここで、否定文における DE N と UN N を比較してみることにする。

(43) Il n'y a pas de chef.

(44) Il n'y a pas un chef.

(44) の *un* が数詞でない限りにおいては、(43) も (44) も否定は名詞に及んでいると解釈できる。しかしながら、(43) と (44) とでは否定のスコープが同じところに及んでいるわけではない。(43) では *chef* が表す対象の存在に否定が及んでいるのに対し、(44) では *chef* という名称が否定されている。名称が否定されているということは、すなわち、その名称を与える適正が否定されているということである。言い換えれば、(43) では否定のスコープが *chef* の「量」に及んでいるのに対し、(44) では *chef* の「質」に及んでいるのである。したがって、外延が否定された場合には DE N として具現化し、内包が否定された場合には UN N として具現化すると言える。(43) も (44) も肯定文に書き換えればどちらも

(45) Il y a un chef.

となるわけであり、この場合の *un chef* は量的解釈か質的解釈かの区別が曖昧であるということになる。

最後に、文全体に否定が及んでいる場合について考察を行う。

(46) Un critique abruti me débinait en disant que j'écrivais des histoires de touche-pipi. Je savais bien que *je n'écrivais pas des histoires de touche-pipi*, le critique a finalement été viré de son journal, est devenu un pauvre

フランス語における否定文の直接目的補語として現れる不定名詞句 UN N について

hère qui a affamé ses enfants. (GUIBERT, Hervé, *Le protocole compassionnel*, 2007, p. 148)

(46) においては、まず *j'écrivais des histoires de touche-pipi* という肯定形が現れ、それをメタ言語的に否定する形で *je n'écrivais pas des histoires de touche-pipi* という否定形が直後に現れている。このような否定文は次のように図式化することができるであろう。

(46') NÉG[j'écrivais des histoires de touche-pipi]

このように、否定のスコープが命題内容全体に及んでいるため、名詞の存在のみに否定が及んでいる DE N の形は現れないと考えられる。次の例においては、命題内容の対立が見られる。

(47) *Je serais toujours la première de la classe. Obtenant mon certificat d'études et une bourse, je poursuivrais mes études, irais à Paris, deviendrais une dame et reviendrais à Vaux couverte de diplômes, grande couturière qui n'exécuterait pas des vêtements, mais dessinerait des robes, créerait des modèles.* (SZCZUPAK-THOMAS, Yvette, *Un diamant brut Vézelay-Paris 1938-1950*, 2008, p. 19, I VAUX)

(47) においては、「服を制作する」、「ドレスをデザインする」、「型を創作する」という3つの作業について、「服を制作する」は否定され、後の2つは肯定されている。ここでも「服を制作する」という命題内容全体が否定のスコープに入っているため、単に服の存在を否定する *de vêtements* という形はとらないのであると考えられる。次の例では命題内容が列挙されている。

(48) *Sans doute, comme ça n'a guère de sens pour moi maintenant de travailler si je n'ai pas de projet précis, un de mes problèmes est que je travaille peu, donc je m'ennuie. Je n'écris pas une lettre, je ne réponds pas au téléphone, je ne fais pas de secrétariat, je ne m'intéresse presque à rien, je passe deux ou trois heures par jour à regarder la télévision...* (BOLTANSKI, Christian

GRENIER, *La vie possible de Christian Boltanski*, 2007, p. 221, CHAPITRE 14 Avant la mort)

(48) においては、話し手の怠惰さを表す具体例が列挙されているが、その一つめとして挙げられているのが「手紙を書かない」というものである。ここで現れている *une lettre* を「1 通も」と解釈することも可能かもしれないが、必ずしもそのような強調の意図はなく、「*j'écris une lettre*」という命題内容全体を否定していると解釈する方が自然であるように思われる。否定のスコープに関しては命題内容全体にかかっていると云えるが、*une lettre* という不定名詞句に注目すると、これは「手紙というもの」を表しており、否定が名詞の名称に及んでいる場合と同様、名詞が表しているものの内包がかかっていると考えられる。次の例も同様に分析できるであろう。

(49) Ce qu'il faut aussi, c'est bien marquer la différence entre la contraception qui, *lorsque les femmes ne désirent pas un enfant*, doit être encouragée par tous les moyens et dont le remboursement par la Sécurité sociale vient d'être décidé, et l'avortement que la société tolère mais qu'elle ne saurait ni prendre en charge ni encourager. (VEIL, Simone, *Une vie*, 2007, p. 361, Annexes, Discours prononcé le 26 novembre 1974 à l'Assemblée nationale)

(49) において *d'enfant* ではなく *un enfant* となっているのは、否定のスコープが *les femmes désirent un enfant* という命題内容全体に及んでいるからであると考えられるが、その際に、*enfant* は外延的に捉えられているのではなく、内包的に捉えられているのである。

## 5. おわりに

本稿では、否定文の直接目的補語として現れる UN N について考察を行った。このような例は、UN が数詞である場合、肯定的意味を持つ場合、否定が付加辞や副詞に及んでいる場合、名詞句の対立がある場合、文全体が否定されている場合の5つに分類できる。これらを否定のスコープという観点から捉えなおすと、否定が数詞に及んでいる場合、否定がどこにも

及んでいない場合、否定が付加辞や副詞に及んでいる場合、否定が名詞の「名札」に及んでいる場合、否定が文全体に及んでいる場合となる。否定が数詞に及んでいる場合、「1」を否定することによって得られる数字は一般に「0」であり、結果的に否定の強調の効果が表れるが、「1」以外の数字であれば何でもよい場合、場合によっては「2」以上の数字が現れることもある。否定が意味的にどこにも及んでいない場合、UN N の出現は当然と言えるが、否定形が現れる根拠は話し手の思考にあると考えられる。否定が付加辞や副詞に及んでいる場合、否定のスコープは名詞ではなく、名詞を修飾する形容詞や分詞、あるいは動詞を修飾する副詞に及んでいるため、名詞句によって表されている対象の存在は否定されていないことになる。否定が名詞の「名札」に及んでいる場合、否定のスコープは名詞に及んでいるものの、「存在」が否定されているわけではなく、「名札」が否定されているため、DE N にはならない。すなわち、DE N として具現化するのは名詞の外延が否定されている場合であって、名詞の内包が否定されている場合には UN N として具現化するのである。最後に、否定が文全体に及んでいる場合については、命題内容全体が否定のスコープに入っているため、不定名詞句に変化は生じない。この場合、名詞の「名札」が否定されている場合と同様、UN N は名詞の内包とかがかわっていると考えられる。今後は、このような UN N と名詞の内包との関係についてさらに詳しく調べていくことを課題としたい。

## 注

- 1) « Dans une phrase nominale, la négation se construit avec DE :

*Pas d'histoire ; pas de quartier.*

Le substantif complément d'objet d'un verbe à la forme négative se présente aussi à la forme réduite DE :

*Je n'ai pas de chaussures (et non pas des). »*

- 2) « Enfin, dans les GN compléments des phrases négatives on emploie le marqueur *de là* où l'on aurait *un, du, de la, des* dans la phrase positive correspondante : *J'ai un billet / Je n'ai pas de billet - J'ai du pain / je n'ai pas de pain - Il y a des gâteaux / Il n'y a pas de gâteaux. »*
- 3) « c) Lorsqu'on transforme une forme affirmative en forme négative, on remplace *par de* les articles indéfinis ou partitifs accompagnant un objet direct ou un sujet

« réel » :

*Il boit du vin* → *Il ne boit pas DE vin*, ou ... *jamais DE vin*, ou ... *plus DE vin*. — *Il y a UN enfant* → *Il n'y a pas D'enfant*. — *Elle a DES amis* → *Elle n'a guère D'amis*, ou ... *pas D'amis* ou *Elle n'a D'amis nulle part*. — *Quelqu'un a des amis* → *Personne n'a D'amis* ou *Ni l'un ni l'autre n'ont D'amis*. — Ex. : *Vous ne m'avez jamais fait DE peine* (PROUST, *Rech.*, t.I, p. 145). — *Il n'y a pas DE grandes personnes* (MALRAUX, *Antimémoires*, p. 10). — *Il ne faut pas dire DE mal des serpents* (BRASILLACH, *Sept couleurs*, p. 158). — *Ne faites-vous jamais DE projets d'avenir, mon enfant ?* (Green, *Mont-Cinère*, XXVII.) »

4) 文法書のほか、WILMET (1986)、松原 (2008) においても、否定文の直接目的補語が de N にならない例について指摘されている。

5) « *Toutefois, si la négation porte non sur le substantif lui-même, mais sur la qualité qui l'accompagne, l'article DU, DE LA, DES est possible : Je ne vous ferai pas des reproches frivoles* (RACINE). *Je n'ai pas vu des fleurs, mais de l'herbe.* »

6) « *Les articles indéfinis ou partitifs se maintiennent*  
— Si la phrase (ou le membre de phrase) a un sens positif : *On ne saurait faire une omelette sans casser DES œufs* (Ac.). [= On casse nécessairement des œufs.] — *N'avez-vous pas DES amis pour vous défendre ?* [= Vos amis devraient vous défendre.] — *Est-ce que vous pouvez empêcher qu'on ne donne DES sérénades à votre femme ?* (MUSSET, *Capr. de Mar.*, I, 2.) [*Ne* explétif.] [...]

— Si la négation ne porte pas réellement sur le nom : *On n'y voyait presque jamais DES barques de pêche* (P. BENOIT, *Axelle*, p. 10). [= On y voyait éventuellement des barques, mais non des barques de pêche.] — *Je n'ai pas amassé DES millions pour envoyer mon unique héritier se faire casser la tête en Afrique !* (AUGIER, *Effrontés*, I, 2.) [= J'ai amassé des millions, mais non pour...]

— Si le syntagme nié s'oppose à un autre syntagme de même fonction : *Elle n'a pas demandé DU vin, mais de la bière.* — L'opposition est implicite : *Nous ne disons pas DU mal de lui !* (Ionesco, *Amédée*, p. 256.)

Le fait qu'avec l'attribut du verbe *être*, on emploie l'article indéfini ou partitif paraît ressortir à la même cause : *Ce n'est pas UNE parente.* — *Ce n'est pas DU vin, ni DE L'eau.* »

7) この例は、(1) に挙げたように II représentait un serpent boa qui digérait un éléphant. と続くため、朝倉 (2002) の分類ではむしろ「①対立を表わす文」の方に入れるべきであろう。

8) なお、否定の限定辞 de については、GAATONE (1971)、GAATONE (1992) を参照のこと。

9) « La forme atone *ne*, négation ordinaire dans la langue du Moyen Âge, a été de très bonne heure renforcée par des noms désignant une petite quantité, une petite étendue, une chose de valeur insignifiante : *pas, point, mie* (= miette), *goutte, mot, nois, pois, espi, maaille* (petite pièce de monnaie), *dé, bouton, denier, pomme, grain, festu*, etc. Par ex. : *Ne veez* [= voyez] GUTE (WACE, *Brut*, 516). — *Gaufrois nel crient* [= ne le craint] *un espi de froment* (ADENET LE ROI, *Enfances Ogier*, 321). — *Ne li grevoit travaux* [= l'effort ne lui était pas pénible] UNE MAAILLE (*ib.*, 5406). — Le choix ne s'est pas opéré de la même façon partout : il y a des dialectes où l'auxiliaire normal est *point* ; d'autres où c'est *mie* ; d'autres encore où c'est *nient* (§733, Hist.) ; etc. En Normandie, on emploie *brin* : *J'avais peur du mal de mer et je n'en ai* BRIN (FLAUB., *Corresp.*, 1<sup>er</sup> déc. 1849). — *Elle* [= une négresse] n'est BRIN blanche [dit un paysan] (MAUPASS., *C.*, Boitelle). — Pour donner une impression d'archaïsme : *De tels noms ne lui vont* BRIN (BÉRANGER, *Chans. nouvelles*, Baptême de Volt.). »

### 参考文献

- CHEVALIER, J.-C., C. BLANCHE-BENVENISTE, M. ARRIVÉ & J. PEYTARD (2002) : *Grammaire du français contemporain*, Larousse, Paris.
- FLAUX, N. (1997) : « Les déterminants et le nombre », *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois Presses Université, Arras, pp. 13–82.
- GAATONE, D. (1971) : *Étude descriptive du système de la négation en français contemporain*, Librairie Droz, Genève.
- GAATONE, D. (1992) : « De négatif entre la syntaxe et la sémantique. Réflexions sur quelques propriétés du déterminant *de* », *Langue française*, 94, pp. 93–102.
- GREVISSE, M. (1993) : *Le bon usage* (13<sup>e</sup> éd.), Duculot, Paris & Louvain-la-Neuve.
- RIEGEL, M., J.-C. PELLAT & R. RIOUL (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France, Paris.
- WILMET, M. (1986) : *La détermination nominale*, Presses Universitaires de France, Paris.
- 朝倉季雄 (2002) : 『新フランス文法事典』, 白水社.
- 石野好一 (2007) : 『フランス語を知る、ことばを考える』, 朝日出版社.
- 一川周史 (2001) : 『新・冠詞抜きでフランス語はわからない』, 駿河台出版社.
- 福島祥行 (2010a) : 「浪花ふらんす亭弥縫録11」, 『ふらんす』, 2010年2月号, pp. 32–35.
- 福島祥行 (2010b) : 「浪花ふらんす亭弥縫録12」, 『ふらんす』, 2010年3月号, pp. 32–35.
- 松原秀治 (2008) : 『フランス語の冠詞』, 白水社.

## Le syntagme nominal UN N apparaissant en tant que complément d'objet direct dans une phrase négative en français

Keiichi NAGANUMA

En français, lorsque les syntagmes nominaux indéfinis apparaissent en tant que compléments d'objet direct dans une phrase négative, les substantifs sont introduits normalement par le déterminant DE : *je n'ai pas de frère, il ne porte pas de lunettes*, etc. Il apparaît pourtant dans le même environnement parfois des syntagmes nominaux sous la forme UN N : *mon dessin ne représentait pas un chapeau, Jérusalem ne constitue pas un refuge*, etc.

Il est possible de répartir en cinq groupes les phrases négatives ayant pour complément d'objet direct le syntagme nominal UN N suivant la portée de la négation : les phrases où la négation porte sur UN, celles où elle ne porte sur rien, celles où elle porte sur l'épithète ou sur l'adverbe, celles où elle porte sur l'« étiquette » du nom et celles où elle porte sur la phrase entière.

Lorsque la négation porte sur UN, il s'agit du numéral et il y a le plus souvent référence à ZÉRO, ce qui ne nous empêche pourtant jamais de parvenir à DEUX ou plus : *je n'ai pas un chat, mais trois*. Quand la négation ne porte sur rien, il s'agit d'un procédé rhétorique pour suggérer l'affirmation et il est normal que UN N apparaisse. Cependant, la négation ne se présente pas pour rien : elle existe en fait dans la pensée du locuteur. Dans le cas où elle porte sur l'épithète ou sur l'adverbe, il s'agit de la négation partitive.

En ce qui concerne le quatrième groupe, il est possible de l'analyser en le comparant avec DE N. Quand la négation porte sur le syntagme nominal, DE N apparaît s'il s'agit de l'existence du référent du nom, alors que UN N apparaît s'il s'agit de l'« étiquette » du nom. Autrement dit DE N a rapport à l'extension du nom tandis que UN N concerne son intension. Enfin lorsque la négation porte sur la phrase entière, il n'y a pas l'intention de nier l'existence du référent du nom. Dans ce cas également, il s'agit plutôt de l'intension du nom.